一般部門

一瞬の花見

【木村（きむら） 光子（みつこ）・神奈川県】

第3回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

2月23日の朝、主人が交通事故で病院に搬送されたという電話を受けました。とるものもとりあえず病院へ。「やけどがひどく、対応できる先生が今いないので」と、また、救急車で他の病院へ運ばれ、すぐに手術をすることに。

「両足切断、両手などの手術、内臓は後回し」などと説明されたのも記憶にありません。ただ署名したことだけ覚えています。

意識が回復した時、足がなくなったことをどう説明しようと思案しても、言葉が浮かびませんでしたが、先生が「私から話しましょう」と言ってくれました。

生死のはざまで1カ月余り、面会時間は1日10分程度、それでも毎日病院へ。先生や看護師さんたちには親切に良くやっていただきました。

駅から病院への道は川が流れていて、桜の花が咲き始めました。でも主人の体は身動きもできず寝たきりでした。そんなある晴れた日に、病院の通用口から1台のベッドを押しながら看護師さんが出てきました。驚いたことにベッドの上に寝ているのは主人でした。その看護師さんは「お天気も良く、桜が満開なので、お花見にお誘いしました」と言って玄関を回って「きれいでしょう」と中に入って行かれました。一瞬のことでした。

歩くこともできず、手足が不自由で何も分からない主人を、春の暖かい日差しを浴びながらの花見に連れ出してくれたのです。

なんと素晴らしい、思いやりの深い看護師さんでしょう。看護師さんは主人に「生きようとする力」を無意識の中に与えてくれたのだと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

その後、手術の繰り返しと、リハビリに励みながら10カ月の病院生活でしたが、先生や看護師さんたちに助けられながら、少しずつ元気を取り戻すことができました。

桜が咲くころになるとあの時の看護師さんを思い出します。車いすの生活ですが11年になります。残された力で前向きに生きています。

本当にありがとうございました。